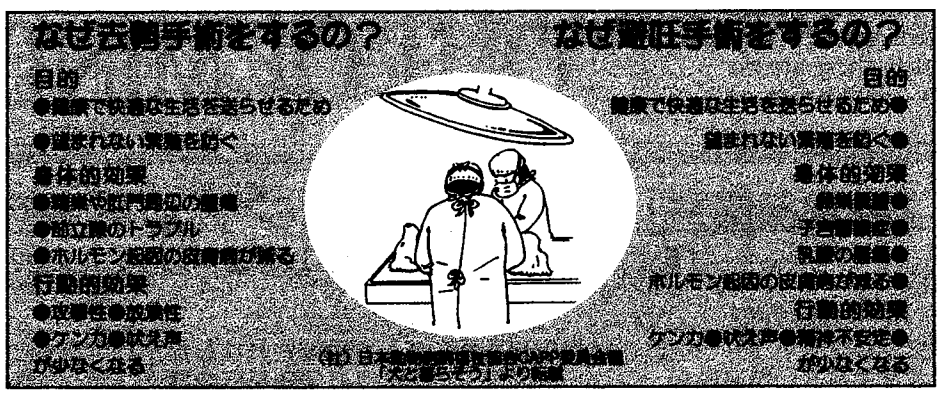
あなたはこんな時
最後まで保護者になってくれますか？
第6回 あなたは本当に動物愛護家と言えるでしょうか？（2）

古木 昌代

世間には、犬や猫が好きと言う人は数多くいますし、実際に大勢の人が犬や猫を飼っています。しかし我々から見ますと、いわゆる「犬好き・猫好き」を本当の意味で動物愛護家と呼ぶには首をかしげざるをえないことが多々あります。いくつかの実例を紹介し、今一度みなさんとご一緒に検討してみたいと思います。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

避妊・去勢を何故しない？自分の飼っているペットを、痛いめにあわすのは可愛そうだとか、自然のままにするべきだという理由で不妊手術を施さない人がいます。また、メスの飼主の中には一度は子供を産ませたほうが良いとかたくなに信じている人、家族の一員という意識が高じるあまり、まるで孫の誕生を期待するような感覚でペットに子供を産ませようとする人（純血種の場合は高い交配料を払ってまで）、オスを飼っている場合は、去勢するのは虐待だと言い張る人もいれば、どこのメスに子供を産ませようが自分のところは関係ないという無責任きわまりない人まで理由は様々です。これらの人達は自分が飼っているペットだけがよければ他はどうでも良い、と考えるただのエゴイストにすぎません。産まれた子供にはちゃんと貰い手を見つけているといいますが、一対の犬は1年で16匹、3年間では500匹以上になり、そのすべてに里親を見つけることは可能なのかと問い詰めますと、彼等は決まって「そんな先のことまで知らない」と答えます。この軽薄で無責任な意識が、行政により殺処分される不要ペット予備軍を数限りなく産みだしているのです。今は麻酔や医療技術が発達しているので、不妊手術は動物にとって心身ともにそれほど負担にはならず、逆にいろいろとプラスの効果があることが医学的に証明されています。オスに去勢手術を施すのは決して虐待ではないのです。（イラスト参照）注射は痛いから可愛そうと言って子供に予防接種をしない親がいるとしたら、これはもう無知としか言いようがないのと同様、うわべだけの感傷で不妊手術を拒否した結果、多数の不幸な命が生み出されるとしたら、またそれを殺処分するために多額の税金が浪費されるとしたらこれほど罪作りなことはありません。また自然の摂理を尊重するといっても、今の日本はホームレスの動物が安楽に生きていくことは不可能であり、犬に至っては生きる権利さえも行政によって剥奪されているのです。



この他にも、犬や猫に不妊手術をすれば頭数が減少しやがては絶滅すると本気で考えている人もいれば、あきれたことに「犬猫の数が少なくなれば患者の数も減り営業収入も下がる」という理由で不妊手術に反対する獣医師もいるとのことです。たしかに、動物愛護団体が行っている避妊去勢奨励運動が功を奏し、行政で殺処分される犬猫の頭数は以前よりは減少しているのは事実ですが、一般的な犬猫がレッドデータブックに記載されることはまずないでしょうし、新しく産まれた犬猫のすべてが動物病院の門をくぐるとは限りません。しかし、もし不妊手術を怠れば望まれずに生まれる小犬小猫の数は確実に増加し、その結果行政による殺処分頭数が著しく跳ね上がることだけはたしかです！！　不妊手術をするにはかなりの費用がかかるため、手術をするのをちゅうちょする人もいます。ことに個人で極端な多頭飼いをしている場合にこの傾向が強いようです。エサ代その他で経済的負担が少なくないのはわかりますが、といって手をこまねいていると、すべてが同性で無い限り自然繁殖するのは当然のことです。外部と完全に遮断されているところであれば、手術費用の安いオスだけを去勢するとか、オスとメスの居住エリアを分けるなど徹底した管理が必要です。さもないと、「自家生産」することになり結果的には自分の首を締めることになります。県や市によっては、また一部の動物愛護団体でも助成金を支給しているところや、定期的に安い料金で手術を行っている場合もあります。助成金についてはアークでも目下検討中ですが、これらをうまく利用して1匹でも多く不妊手術を受けさせることが必要でしょう。誤った考えを是正し意識改革をすることが、真の動物愛護家への第一歩ではないでしょうか。